# 高知県立坂本龍馬記念館・現代龍馬学会共催事業

「龍馬が七歳だったころ―天保期の土佐の社会とくらし―」展　記念講演会

企画展

## 「龍馬の時代の高知城下町 ～城下の風流「花台」を中心に～」

横山　和弘 氏（高知県立高知城歴史博物館副館長兼教育普及課長）

**令和4年9月11日（日）**
**13時30分～15時**
**於 坂本龍馬記念館新館1階ホール**

江戸時代の高知城下町は、大きく郭中・下町・上町に分かれていた。龍馬が生まれ育った上町エリアは本丁筋、水通町、通町などと東西に細長い町割だった。上町本丁が祭りに花台を出したか定かでないが、水通町は花台を出した記録がある。

花台とは、江戸時代から明治・大正時代にかけて作られた山車（だし）の一種で、笠鉾・花鉾ともいう。祭礼の賑わいを演出するもので、1700年代後半頃から、歌舞伎や浄瑠璃にちなむ人形を飾り、何層もの楼閣をかたどったタイプの花台が登場した。これらの花台は担いだり車輪を付けて引いたりするもので、各町で作る花台で意匠や大きさを競った。山車を出す祭りは主に都市部で行われ、全国各地にある。

高知では、野中兼山が失脚した翌年の寛文4（1664）年、朝倉神社の祭礼で笠鉾二基を出したのが最初とされる（『南路志』に笠鉾の絵や記述あり）。天和年間には下町の要法寺町が潮江天満宮の祭礼に笠鉾を出し、元禄12（1699）年には比島神明宮・石立八幡宮の祭礼に「ダンヂリ」が出た。寛延2（1749）年には、潮江天満宮の祭りに下町の朝倉町から花台の願いが出、許可された。宝暦元（1751）年には上町の水通町が石立八幡宮の祭礼に花鉾を出し、天明年間には下町の八百屋町から出た花台の久米仙人の人形が話題となった。文化3（1806）年には、花台人形の大きさや数に規制がかけられたことから、花台人形が隆盛していた様子がわかる。花台の出る神社はいわゆる城下町の範囲でなくその周辺に複数あるが、1800年代になると城の堀の中に山内一豊などを祀る藤並神社ができ、藤並神社の花台が注目される花台として展開していく。

江戸時代中後期以降、社会状況の悪化にともない、全国的に藩祖を拠り所に体制を再構築しようとする動きが現れる。土佐でも初代藩主一豊の200回忌を契機に、一豊夫妻と2代藩主忠義を祀る藤並神社を創る。この神社が「堀の内側」に作られたというのが大きなポイント。藤並神社は天保6（1835）年に「大明神号」が許され、翌年にそれを記念した大規模な祭りが行われる。現在の山内神社の場所が御旅所となり、城下を席巻するおなばれが行われる。祭では村々の芸能も披露され、10万人以上が集まったとされる。

この祭りに登場する笠鉾・花鉾14基について、囃子や人形、摘画の数の記録がある。花鉾と笠鉾の違いはよく分からない。下町の縦堀南側地区は潮江八幡宮に出し、北側地区は藤並神社に出している。3日間の巡行ルートも判明し、追手筋を通っていることもわかる。天保7（1836）年以降も藤並神社の祭礼は続いていたと思われ、この年2歳だった龍馬も、のちには花台を目にしたかもしれない。

嘉永6（1853）年から明治6（1873）年までの藤並神社の祭礼記録を見ると、土佐には政治的な混乱もありながら、町人は毎年のように祭に花台を出し続けている。潮江天満宮の祭礼に出た花台の絵（「土佐年中行事図絵」）には、八百屋町の武市甚七が作った仙人の人形が名物として描かれている。また、花台の後ろには「番号ヲ表スルモノ」と記されており、花台には出る順番があったのかもしれない。

明治以降も祭りに花台は出るが、明治7（1874）年ごろから規制が出されるようになる。例えば明治10（1877）年には、花台を出すのは「無益の失費」「多少の悪弊を醸長」するものとして「不都合」だとされている。明治28（1895）年頃には電線の普及にともない花台が低くなる。明治30（1897）年頃からは夏祭りや大きな催し等での花台が盛んになる。寺田寅彦は「子供花台」の存在を記している。以後の花台は、移動しない「据付花台」「定置花台」に移行し、江戸時代以来の移動する花台は姿を消した。

明治23（1890）年の『土陽新聞』に、昔隆盛したものとして花台の記事があり、河田小龍の絵が添えられている。花台の囃子を「トンリュウ」と表現するが、「トン」は太鼓、「リュウ」は胡弓の音を表すものではないか。昭和9年生まれの男性の証言によると、昭和15（1940）年、当時6才で見た紀元二千六百年の祭りの花台が、最後の花台ではないかということである。

明治44（1911）年、来高した閑院宮夫妻が高知公園で見た花台は「据付花台」だと思われる。大正11（1922）年に東宮（のちの昭和天皇）が行啓した際には、「古式花台」を台覧したと新聞に書かれている。この時の花台は「土佐名物花台」として、古い絵はがきに姿をとどめている。

記念講演会

# 企画展「龍馬最後の帰郷 ―坂本家と川島家・中城家―」展

# 「龍馬と天皇と長州」

## 一坂 太郎氏（萩博物館特別学芸員）

令和5年1月14日（土）13時30分～15時
於 坂本龍馬記念館新館1階ホール

レジュメ冒頭にある画像は、『楢崎剛十郎の手紙とその生涯』の口絵で、坂本龍馬筆とされる「令窮皇国（皇国を窮めしむ）」という書。楢崎剛十郎は慶応二年に起きた第二奇兵隊脱走事件において、脱走を止めようとして斬り殺された人物。この書を故土居晴夫氏に見せたところ、「皇国などという言葉を龍馬は使わない」と言われた。自分もこの書は偽物だと思うが、今になって本当にそうだろうかと考える。

幕末の思想的な出発点は「尊王攘夷」で、後期水戸学から出ている。「尊王」は、日本は野蛮な外国と違い「皇室」という一本の筋が通っている、という国体論。「攘夷」は国防論。これを合わせた「尊王攘夷」が、日本中に広まってゆく。会沢正志斎の「新論」には、皇室を世界の核とする神国思想がよく表れている。長州藩は赤川淡水（佐久間佐兵衛）や吉田松陰を通して、尊王攘夷論の影響を強く受けた。もともと長州はおとなしい藩で、薩摩や土佐のように有志大名として国政に加わらなかった。

ペリー来航時、剣術修業のため江戸にいた龍馬は、父宛の手紙に「異人の首を取って帰る」と書いている。この手紙は坂本家経由で出てきたものでなく、突然活字となって現れたもので、半々ぐらいで偽物ではないかと考えている。当時の龍馬は尊攘論に興味がうすく、安政5年に水戸藩の住谷寅之助が土佐の国境で龍馬に会ったが、「龍馬は時勢にうとく、時間を無駄にした」と日記に書いている。長州の久坂玄瑞は英語学習のため江戸に遊学する。輸出過多が急激な物価高を招いたと知った久坂は、庶民の暮らしを守るため政治運動を始める。久坂は薩摩の樺山三円、土佐の武市半平太らと横のつながりを作り（横議横行）、おのおの藩を天皇の命で動くようにしようとする。武市は帰国し、土佐勤王党を作るが、血判状は原本がなく、信憑性に欠ける。血盟者の8人までは江戸、9人目からは土佐だが、9人目が龍馬という点も怪しい。龍馬がいつ尊王攘夷思想に「感染」したかというと、武市の使いとして長州の久坂に手紙を届けに行った時だろう。当時の長州は久坂の思い通り勤王一色にならず、長井雅楽の「航海遠略策」によって政局に進出していた。時の孝明天皇も内々では開国を避けられないと考えていたようだが、開国の勅許を与えなかったことで攘夷主義だと思われていた。しかしこのままでは天皇の威厳を保てないため、長州の航海遠略策に乗ろうとしていた。久坂はこれを嘆き、長州に来た龍馬に尊王攘夷の集中セミナーを10日ほど行ったのだろう。

土佐や長州は無理でも、薩摩は攘夷のために動くと思われていた。龍馬は武市に説いたが武市は乗らず、龍馬は文久2年、薩摩の挙兵計画に参加しようと脱藩した。しかし薩摩の島津久光は挙兵するつもりはなく、勅をもらって幕府を改革しようとする。その結果徳川慶喜の将軍後見職、松平春嶽の政事総裁職などが実現した。勅には絶対的な力があり逆らえない。結果幕府も攘夷期限を決めて実行せざるを得なくなった。

龍馬が池内蔵太の母に宛てた手紙には「朝廷は土佐より父母より大事にしなければならない」という神国思想の影響が見える。小説等のイメージとは異なり、実際には龍馬でもこうした発言をする。だが、勝海舟や横井小楠との出会いが、龍馬の天皇観を変えたと考えられる。龍馬は兵庫開港を恐れる孝明天皇を安心させるべく、神戸に海軍操練所を設けようとする海舟の下で働いた。しかし佐藤与之助と連名で海舟に宛てた手紙には、龍馬らが外国船を全て打てとの天皇の方針を変えさせるため、大奔走していた様子がうかがえる。

長州藩では長井が失脚し、成算を考えずに攘夷を実行しようとする久坂らが実権を握る。藩主毛利敬親は有志大名ではないので、中央政局に人脈も無く、久坂らに振りまわされる。外国船を砲撃するも、禁門の変で敗れて長州は朝敵に。第一次長州征討後、高杉晋作・桂小五郎らは武備恭順を藩是とした。

薩摩はこうした長州と手を結ぼうとする。龍馬は桂と話し合いに行くが、桂は他の長州人とは違い、神国思想に固まっておらず、薩摩と話し合いが出来るとの手応えを得る。2度目の長州征討令に薩摩は反対し、大久保一蔵は「非義の勅命は勅命にあらず（自分たちに不都合な勅には従わない）」とまで述べる。勅が絶対であるとすれば、これは危険な考えである。この言葉を長州に届ける任務が龍馬に与えられる。もし失敗すれば提携どころか、これまでの努力が水泡に帰すかもしれない。桂という窓口を選び、長州を説いたところが、同盟における龍馬最大の功だったと考える。それは天皇の政治利用を、薩長の指導者たちが共有したことを意味する。

世に言う「新婚旅行」で、龍馬が高千穂峰の天逆鉾を抜いたという話がある。原理主義的な神国思想ならばそんなことはしない。慶喜は、孝明天皇が認めなかった兵庫開港の勅許を、明治天皇の代になって得ることに成功し、慶喜の動きを警戒した薩摩は武力討幕に傾いてゆく。薩土盟約で土佐が大政奉還を持ち出し、薩摩に待ったをかけるが、イカルス号事件によって時機を逸する。慶応3年9月、桂こと木戸が龍馬に宛てた、討幕を舞台劇にたとえた手紙には、天皇は登場しない。同じ頃、薩長は天皇を「玉」と呼んだ。

明治16年発表の『汗血千里駒』では逆鉾を抜いたのは妻りょうで、後日知った龍馬は怒ったことになっている。これは龍馬を「勤王の志士」に祭り上げるための苦しい改変だろう。「口惜しい」と怒ったりょうは、いくつかの回顧談を残し、その改変を正そうと努力している。

特別展「龍馬の師 勝海舟生誕二百年」展

記念講演会

# 「海舟・龍馬の海防論の礎
## ―伊勢国松阪の竹川竹斎と松浦武四郎」

山本　命氏（松阪市松浦武四郎記念館長）

令和5年3月4日（土）13時30分～15時
於 坂本龍馬記念館新館1階ホール

古くから商人の町として栄えた松阪市には多くの豪商がおり、三井家発祥の地のほか旧小津清左衛門家、旧長谷川治郎兵衛家（重要文化財）などが現存する。松阪は伊勢神宮参詣のために多くの人や物、情報、文化が行き来する場所であった。

嘉永6年のペリー来航に伴い、勝海舟は海防に関する建白書を2回提出している。海舟の建白に影響を与えたと考えられるのが、松阪の豪商であり蔵書家でもある竹川竹斎、そして龍馬が志した蝦夷地開拓の背景には、同じ松阪出身の松浦武四郎の存在があった。

長く泰平の世が続いた江戸時代、日本の端がどこからどこまでで、端がどうなっているかを考える必要はなかった。ヨーロッパ諸国はアジアにも植民地を拡大し、貿易の拠点とした。アヘン戦争における清の敗北は、日本にも大きな衝撃を与えている。アメリカは清と結んだ望厦（ぼうか）条約と同様の条約を求め、日本に開国を要求した。これに対し幕府は広く国内に意見を求め、結果として幕藩体制は弱体化し、尊皇攘夷思想が高まった。

海舟が提出した建白書「愚衷奉申上候書付」では、軍制改革、人材登用、訓練の3つを課題として掲げている。加えて軍艦が必要だが訓練不足のため、まず江戸の防備を固めるべきとする。次いで出された2通目の建白書はより詳細で、第一に下情を汲むことができる者を上に立たせること、第二に軍艦建造の必要性（莫大の費用は交易の利潤を充て、税金を使ってはならない等）などを掲げる。

海舟の『氷川清話』には、箱館の豪商である渋田利右衛門が、自分に万一のことがあった場合に頼るべき人物として、嘉納治右衛門と竹川竹斎の二人を挙げたとある。竹斎の弟で江戸の商家竹口家を継いだ信義も海舟と親しく、嘉永元年3月の信義の日記には「箱館之人（渋田か）」「御簾本鉋術家（ママ）（海舟か）」が訪ねてきたと記される。海舟はたびたび土産を持って信義を訪ね、金を借りているが、信義に提供した情報は竹斎にももたらされていた。海舟は嘉永3年5月に初めて竹斎と会い、安政2年には海防体制見分のため伊勢を訪れた海舟と竹斎・信義が懇談、竹斎から海舟に太刀が、海舟から竹斎に馬上銃が贈られた。この太刀は海舟の写真にも写っている。

竹川竹斎は文化6年、現在の松阪市射和（いざわ）町生まれ。父は東竹川家6代目当主で本居宣長門下、母は神官の娘。竹川家は両替と太物を商い、幕府御為替御用方を務めていた。竹斎自身は諸学に通じた博覧強記の人で、商人として射和の人々のために公共事業を行い、蔵書をもとに「射和文庫射陽書院」を創設した。これには知識を地域の人に開放することで農商が盛んになり、ひいては富国につながるとの考えがあった。また、産業振興のため茶・桑の栽培を勧め、輸出品につなげようとしていた。アヘン戦争によって茶や絹の需要があることを知っていたためであろう。一方で「護国論」「護国後論」を著して開国・通商を主張、攘夷思想には批判的であり、幕末の幕閣中枢に強い影響を与えた。小栗忠順やヘボン、パークスらとも面識があり、パークスと面会時にベアトが撮影した写真が残っている。維新により幕府預け金の全てを没収され、家業が大きく傾いた。明治15年74才で没、墓所には海舟揮毫の篆額「竹川竹斎翁之碑」が刻まれた顕彰碑が建つ。

「護国論」では、輸出品が不足した場合には金銀が流出するため穏便に断り、強いて求められれば打払いもやむなしとする。西洋式軍艦は輸送、貿易に役立つほか、密貿易の取り締まりなどにも利用でき、その利益で軍艦を増やせると説いている。「護国論」は幕府内で回覧され、高い評価を得たことが、信義宛の海舟書簡からわかる。

他方、松浦武四郎とつながりのあった龍馬については、海舟の「幕末日記」に龍馬の言として「過激の志士たち数十人がみな蝦夷地開拓に発奮している」と記される。実際、北添佶磨ら土佐勤王党の一行が蝦夷地を巡り、北添は武四郎と面会、武四郎宛の礼状も残っている。武四郎は志士たちとの交流から「新葉和歌集」の再版や、竹島（現在の鬱陵島）の重要性を訴えた「竹島雑誌」の出版などもおこない、海援隊の「雄魂姓名録」には、武四郎の名もある。龍馬の志は甥の坂本直、直寛、直寛の孫の直行らに引き継がれている。

## こぼれ話 ― 犬歩棒当記（五十）―

# 元亀天正の頃

宮川 禎一

一昨年の七月、滋賀県の湖北にある賤ケ岳にリフトで登り、その雄大な景色を見ながらボランティアガイドの方が語る天正十一年の「賤ケ岳の合戦」の顛末を拝聴しつつ「これは龍馬とも関係がある話だ」と思った。

「元亀天正の頃」とは親戚の川原塚茂太郎への龍馬の手紙（推定文久三年八月）にでてくるフレーズだ。茂太郎さんに坂本家の後継者問題を相談する内容である。勝海舟のもとで海軍修行に励む龍馬なのだが、兄権平からは「十年後には土佐へ帰って坂本家を継げ」などと言われた龍馬がそれを断って「春猪に婿養子をとって」と茂太郎さんに頼んでいる。その中で現代の様子（錦江湾での薩英戦争や下関での攘夷砲撃事件）を受けて「今時の海軍修行というのは元亀天正の頃の武士のようだ（実戦が練習だから死ぬかも）」などと書いている。龍馬の認識は「いま生きている文久三年は戦国時代の最盛期と同じだ」という意味だ。

もちろんこれは信長・秀吉の活躍した時代の歴史物語、たとえば『太閤記』などに出てきそうなフレーズだ。講談師が「時は元亀天正の頃。織田上総介信長公は明智日向守光秀の謀反のために洛中は本能寺にて壮烈なる最期を遂げ～」などと語っているはずだ。戦国時代の物語の枕詞だ。「治承寿永の御時に～」は源平合戦の枕詞である。「激動の昭和史」とかもそうだ。その元号を聞くと歴史物語が脳内で再生を開始するのだ。「時は西暦一五八一年～」では講釈は盛り上がらないだろう。日本に元号があって良かった。

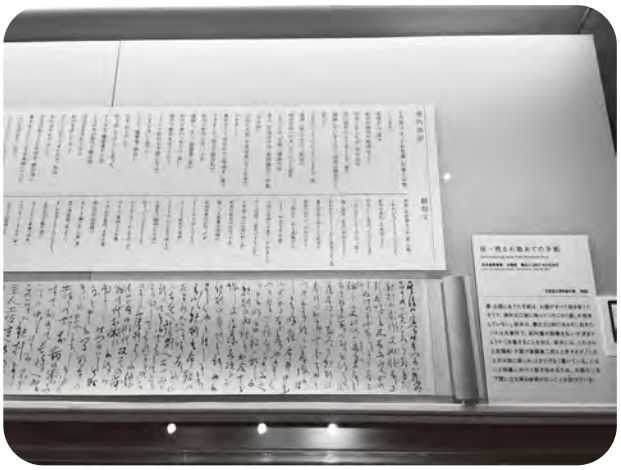
賤ケ岳の合戦とは織田家の後継者をめぐり宿老柴田勝家と新興の羽柴秀吉とが激突した戦いだ。秀吉の天下取りを決めた合戦でもある。湖北の山々に布陣した柴田軍とその南側に対峙した秀吉軍の陣地を想像しながら、天正十一年五月二十日のその日に思いをはせた初夏の一日であった。

主君柴田勝家の身代わりに討死した毛受兄弟の墓
（長浜市余呉町）

## Twitter

**高知県立坂本龍馬記念館**
@ryoma_kinenkan

2月14日　投稿分
筆まめな龍馬なので、
妻・お龍にもたくさん手紙を送ったはずです。
龍馬没後に焼いたとも言われ、
現存するのは1通のみとされています。
今日はバレンタインデー、
お龍との結婚発表は慶応2年2月です。




特別展

龍馬の師
**勝海舟 生誕二百年展**

4月16日（日）まで開催中！

高知県立坂本龍馬記念館・現代龍馬学会
〒781-0262 高知市浦戸城山 830
TEL（088）841-0001　FAX（088）841-0015
mail:gendai-ryoma@kochi-bunkazaidan.or.jp